

化石館だより

コラム

プレウロトマリア から ニッポノマリア へ

化石館だよりNo. 26でプレウロトマリアについて紹介しました。プレウロトマリア・ヨコヤマイ (*Pleurotomaria yokoyamai* Hayasaka)は、1943年に早坂一郎によって記載された大型の巻貝化石で、金生山から産する化石の中でも一、二を争う人気があります。プレウロトマリアは、古腹足目に含まれる一つの科(上科)を示すラテン語の名称で、和名を用いるとオキナエビス科(上科)となります。この科に含まれる現生種のオキナエビスは、明治初期にヒルゲンドルフが江ノ島で手に入れ「生きている化石」としたもので、当時最も原始的な巻貝と考えられ大英博物館が高額の懸賞金をかけて採集を依頼したことがありました。長者貝の異名をもつこの貝は、生息地が特定され入手しやすくなった今でも高額で売買されています。オキナエビスは、殻径が10cm以上にもなり、殻は厚く、色合いも形も優れているので人気が高いのにも納得できます。



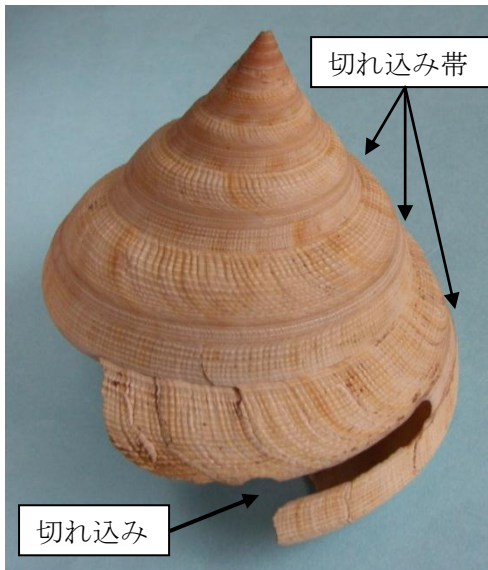
プレウロトマリア・ヨコヤマイ

金生山で産出する化石のプレウロトマリア・ヨコヤマイはオキナエビスによく似た形をしており、大きいものでは殻径20cmにもなります。プレウロトマリア属として記載された化石ですが、現在では別属の巻貝であると考えられるようになり、現生のオキナエビスも別属とされています。

金生山化石館では、プレウロトマリア・ヨコヤマイを、ゾングスピラ・ヨコヤマイという名称で展示しておりますが、直近の研究論文からニッポノマリアという新属に移されたという情報を得ました。

腹足類(巻貝類)には非常に多くの種が存在しており分類が難しく、特に古生代の化石種では系統関係が明らかになっていないものがいくつも存在しています。現生種については軟体部分の解剖やDNAの解析など、多くの情報をもとに検討することができますが、化石種の場合にはほとんどが殻の形状による情報しか存在しませんので、保存状態の良い化石が発見されると、別の属に移し替えたり新たな科や属を設定したりすることがしばしば生じます。

ヨコヤマイは、プレウロトマリア属として記載されましたが、プレウロトマリア属は中生代に出現したことが分かってきて、生息年代が合致しないことから所属を見直す必要性が指摘されました。そのため、ヨコヤマイは、1977年にHayami & Kaseによってバトロトマリア属に移され、2012年にはNützel &



オキナエビス (現生)

Nakazawa によってゾングスピラ属に移されるという経緯をたどってきました。今回新たに、安里、加瀬、他によってニッポノマリアという新属が設定されたのは、殻口に長い「切れ込み」が存在すること、殻壁には「切れ込み」を埋めて生じる「切れ込み帯」の存在が確認できること、深い臍孔が存在することなどが分かってきたからです。

プレウロトマリア・ヨコヤマイは早坂が記載して以降、「バトロトマリア」、「ゾングスピラ」などの属に移し替えられてきました。化石図鑑には創刊時点での名前で紹介されていますから、同じ種なのに属名が異なることで戸惑われる方もあると思います。例えば、保育社の原色化石図鑑では「プレウロトマリア・ヨコヤマイ」ですが、北隆館の日本古生物図鑑では「バトロトマリア?の一種」とされています。古くから化石に親しん

でこられた方には、プレウロトマリアの方が分かりやすく、化石館で現在表示しているゾングスピラに違和感をもたれる方もおられるようです。新しい学名で紹介する場合には、できるだけ旧名を併記するよう心がけたいと思います。

今回ニッポノマリアという新属が提唱されましたが、学名にニッポンが用いられているものといえば、鳥類の朱鷺(トキ) *Nipponia nippon* が思い浮かびます。朱鷺は、国鳥ではありませんが「日本を代表する鳥」ともいわれます。ニッポノマリア・ヨコヤマイもかつてオキナエビスが「生きている化石」として有名になったように、古生代を代表するような巻貝となればうれしいですね。



お知らせ



後期企画展 「山にも貝がいた! —金生山の陸産貝類—」 開催中

期 間 10月8日(土)から1月30日(月)

★ 展示解説をします。ご希望の方は受付に声をかけてください。

(但し、館長不在の場合はご容赦ください)

問い合わせ: 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp